

高知県における *Stellantchasmus falcatus* (Family: Heterophyidae) の人体寄生例について

影 井 昇 大 島 智 夫
石 川 和 夫 木 畑 美 智 江

国立公衆衛生院衛生微生物学部寄生虫研究室

(昭和 39 年 8 月 10 日受領)

横川吸虫 *Metagonimus yokogawai* (Katsurada, 1912) Katsurada, 1912 を始めとする異形吸虫類 (Heterophyidae) の我国における研究は 1912 年横川定によつて横川吸虫の被囊幼虫が鮎から発見されたことに始まり、その後恩知・西尾(1915, '16, '24), 浅田(1928), 越智(1931) 等により異形吸虫類が発見研究され、それ等の生活環が陸続と究明されるに及んだ。

これ等の異形吸虫類の中で *Stellantchasmus* に属する吸虫類は、前記恩知・西尾 (1915) の発見に緒を發するが、その後勝田(1931, '32) の台湾における幾多の研究によりその發育史の全貌がほぼ明らかになつたにもかゝらず其の後現在に至るまで、これ等小形の吸虫類について、その検査法に確實なものゝないことゝ、虫卵による分類に多くの問題を含んでいる為、その人体寄生例はわずかに広島県(赤木ら, 1953), 岡山県(高橋, 1929; 富永ら, 1946) 並びに中国地方(浅田ら, 1952) からの報告を見るにすぎない。しかしながら中間宿主については恩知・西尾 (1915) の福岡県のボラ *Mugil cephalus*, 高橋 (1929) の岡山県におけるボラ, 太田垣 (1952) の広島県におけるボラ, 金光 (1953) の福山のボラ, 太田垣・金光(1953) の広島県からのボラ, メナダ *Liza menada*, マハゼ *Acanthogobius flavimanus*, 高林(1953) の山口県吉田川産ボラ, メナダ, 高木 (1954) の岡山県におけるボラ, メナダ, 青景 (1956) の山口, 広島, 岡山, 兵庫の各県におけるボラ, メナダ, 山口 (1959) 及び三島・山中(1959) の徳島, 高知, 愛媛, 香川各県におけるボラ, メナダについての報告, 又最近浅田ら(1964) により、その被囊幼虫が瀬戸内海, 四国海域, 九州海域地方で広汎に分布していると述べられ、我国各地に産するであろうことは考えられるが、高知県からの人体感染の報告には未だ接しない。

著者らは毎年各地の保健所並びに衛生研究所からの講習生に対して講習の為の材料採集の為に各自の糞便を呈出させ、それについて各種の検査を行わしめているが、それ等の者の中で近年(1963, '64) 高知県出身者に *Stellantchasmus* に属する吸虫が発見される事実を認め、その種の決定を行うと共に、同地方が人体感染の新流行地の一つであると考えられるので、こゝに報告する。

検査の対象並びにその方法

前述せる如く、毎年集る各保健所並びに衛生研究所勤務の衛生検査技士を対象に、クエン酸緩衝液遠沈法, 硫酸亜鉛浮游法, ロ紙培養法を併用して、糞便検査を行った。

検査成績

1963 年, 1964 年 両年の検査成績は第 1 表に示す様に殆んど鉤虫・蛔虫等は検出されなかつたが、横川吸虫や鞭虫等、現在幾つかの問題を残している寄生虫卵保有者の多いのが目立ち、中でも横川吸虫感染者は地域特異性を示しており、その地方における横川吸虫の高度の浸淫を意味するものと考えられた。又横川吸虫感染者の中で高知県出身の 2 名には横川吸虫卵と異なる虫卵が混在しているのを認め、駆虫によつてそのものが下記の如く *Stellantchasmus falcatus* Onji & Nishio, 1915 であることを認めた。

横川吸虫卵保有者とその駆虫

第 1 例:

高知県在住の 45 歳になる 1 女性。

義父が魚釣りが好きで、毎日ボラ, アユ等の淡水, 半鹹水魚をとつてきてはサシミ, 酢味噌等にして食べていたと言う。

第1表 糞便検査成績

年 度	被検者数	有卵者数	蛔虫卵 保有者数	鞭虫卵 保有者数	横川吸虫卵 保有者数	蟯虫卵 保有者数	大腸アメー バ保有者数
1963	36	10(27.8%)	1(2.8%)*	3(8.3%)	4(11.1%)*		1(2.8%)
1964	28	9(32.1%)		4(14.3%)	4(14.3%)*	1(3.6%)	1(3.6%)

*: 大阪府, 広島県, 愛媛県, 高知県, 宮崎県, 鹿児島県での勤務者, 高知県の出身者は共に *Stellantchasmus falcatus* との二重感染者

** : 但し不受精卵

特記すべき自覚症状なし。

第2例:

高知県在住の1男性, 35歳。

アユは毎年サシミ等で食べ, 糞便検査約3カ月前(1963年10月5日頃)にもアユやハヤを食べたと言う。ボラを食べた記憶はないと言う。

自覚症状なく, 1日1回の便通あり。

駆虫方法:

両者は共に投与前日昼食, 夕食を絶ち, 就寝前, フェノバル0.5 gm を服用, 翌朝食事をする事なくカマラ20 gm を一度に服用, 以後安静を保ち, 2時間後に下剤として硫酸マグネシウム20 gm を服用させた。カマラ投与後は, 翌朝の排便までの全てを1回毎に各容器に採集し, 水を加えて静置しては上清を捨て, 数回くり返した後沈渣を少しづつペトリシャーレにとり, 実体顕微鏡下に虫体の数を記録しながら分離採集し, 一部は軽くスライドグラス上で圧平後 Bouin 液で固定し, 型の如くアルコール脱色, 脱水の後, Haematoxylin あるいは Alum-carmin 染色標本として種類の同定並びに計測に用いた。

駆虫成績:

駆虫の成績は第2表に示す様に第1例, 第2例共に横川吸虫の他に非常に小型の吸虫, 即ち *Stellantchasmus* sp. の寄生を認めたが, その寄生数は第1例は横川吸虫よりもむしろ *Stellantchasmus* sp. の方が多く, 第2例では逆に *Stellantchasmus* sp. はわずか6隻にすぎなかった。しかしながら両者共完全に駆虫することは出来ずカマラ投与後3日目の糞便中には未だ虫卵が見出された(第2例においては投与前 EPG 22,800であったものが投与後では5,000であった)。

虫卵及び駆出 *Stellantchasmus* sp. について:

虫卵

虫卵の大きさは20個体の測定で 24.95μ (23.7~26.2 μ) \times 12.19μ (11.2~13.3 μ) を示し, 同時寄生の横川吸虫卵 29.40μ (27.9~32.2) \times 15.92μ (14.3~19.8) (25個体測定) よりやや小さかった(第3表)。

糞便中の卵の色は横川吸虫卵や肝吸虫卵と同様帯黄淡褐色を呈し, 中央部よりも後方部において最も幅広く, 後端は鈍円となり, 前方に向つて少し狭くなつており, やや肝吸虫卵に似ている。前端には小蓋を有し, 蓋との

第2表 駆虫成績

	<i>Metagonimus yokogawai</i>	<i>Stellantchasmus</i> sp.	Total
Case 1	39	1,089	1,128
Case 2	9,531	6	9,537

第3表 *Stellantchasmus* 属の卵子の大きさ (μ)

虫 種	報 告 者	計測個体数	長 径	短 径
	著 者 ら (1964)	20	23.7—26.2(24.95)	11.2—13.3(12.19)
<i>Stellantchasmus falcatus</i>	{ 恩地・西尾 (1915)	100	25 —28 (27)	13 —15 (14)
	{ 高橋 (1929)		23 —27 (26)	13 —15 (14)
	{ 富永 (1942)		24 —27 (25)	12 —15 (13)
<i>Stellantchasmus pseudocirrata</i>	勝田 (1932)	20	22.4—24.0(23.3)	12.8—14.4(13.8)
<i>Stellantchasmus formosanus</i>	勝田 (1931)	15	18.0—24.0(21.0)	12.0—15.0(12.0)

第4表 各 *Stellantchasmus*

種 類	計 測 者	計 測 個 体 数	体 長	体 幅	口 吸 盤		咽
					長 径	幅 径	長 径
	著 者 ら (1964)	5*	455—609 (521.3)	210—308 (265.5)	32.7—35.0 (34.1)	37.3—53.7 (45.7)	18.7—30.3 (25.2)
<i>Stellantchasmus falcatus</i>	恩地・西尾 (1915)	—	470—390 (440)	240—190 (220)	(55)	—	(35)
<i>Stellantchasmus formosanus</i>	勝 田 (1931)	20	324—558 (379)	126—210 (157)	30—51 (37)	36—48 (41)	27—45 (33)
<i>Stellantchasmus pseudocirrata</i>	勝 田 (1932)	20	450—648 (574)	198—324 (238)	39—69 (53)	45—69 (58)	30—45 (34)

* 全て Bouin 液固定による圧平標本

移行部は小隆起している。しかし肝吸虫卵に比べると明らかにその隆起は著明でなく、又肝吸虫卵の卵殻表面に見られる様な亀甲状の紋理はみられない。卵内容は *miracidium* に發育している (写真1~3)。

成虫

体の外形は略卵円形で、体の中央部で最も幅広く、後端は鈍円、前方に向つて稍狭くなり前端は多少尖鋭である。その長径は圧平標本において 521.27μ ($455.00 \sim 609.00 \mu$)、幅は 265.53μ ($210.00 \sim 308.00 \mu$) を示し (第4表)、体色は帯黄淡褐色でやゝ透明、その外表には体前方より斜めに後方に向つて小皮棘を密生するが後方になる従つてやゝ疎になり、後端には全くそれを欠いている (写真4)。

口吸盤は体前端の腹面に向つて開き、大きき 34.06μ ($32.67 \sim 35.00 \mu$) \times 45.73μ ($37.33 \sim 53.67 \mu$)。

消化器系統は口腔に始まり、前咽頭、咽頭、食道に連なり、食道はやがて左右に2分して腸管となり、腸管は体側にそつて後走し、睾丸の約1/5前端に達し盲端に終る。

生殖器系統中、一對の睾丸は体後端において体の両側の大部分を占め、短ダ円形で、左睾丸は稍前位にあつてやゝ小さい。その大ききは右 90.19μ ($56.00 \sim 140.00 \mu$) \times 65.32μ ($56.00 \sim 81.67 \mu$)、左 88.65μ ($63.00 \sim 109.67 \mu$) \times 73.86μ ($58.33 \sim 81.67 \mu$) である。

貯精のうはすこぶる著明で斜に右の腸管にそつて紡錘状の体を横たえ、長径 99.15μ ($93.33 \sim 116.67 \mu$)、幅 46.67μ を示し、外壁は斜走する筋繊維が交互に走り、紡錘状

の Haematoxylin に染まる精子を入れた内腔は射精管に連り、射精管は迂曲して腹吸盤に開口する (写真5)。

卵巢は腹吸盤の後方にあり、略球形に近く $65.33 \mu \times 70.00 \mu$ である。

受精のうは卵巢の右後方部にあり、卵黄巢は小塊状で体後方において点々散在する。

又体後部には多数の虫卵が見られる (写真3)。

考 察

人体寄生吸虫類の中で、最も微小な吸虫類である *Heterophyidae* の研究は、これ等吸虫類が吾国のみならず、世界各国に分布する為、かなりの研究がなされ、Philippin の Africa *et al.* (1935) の報告によると同科に属する吸虫類の人体感染において、その卵子が往々血行を介して随所に移行栓塞し発症する病型 (腸異型吸虫症、心臓異型吸虫症、脳異型吸虫症、脊髄異形吸虫症等) のあることを報告している。

我国においては前述の如く、横川定による横川吸虫 (*Metagonimus yokogawai*) の発見に端を発して各種の人体寄生の異型吸虫類、即ち有害異型吸虫 (*Heterophyes heterophyes nocens* Onji et Nishio, 1915)、高橋吸虫 (*Metagonimus yokogawai takahashi* Suzuki, 1930—横川吸虫との異同は未だ残された問題である—)、鎌形異型吸虫 (*Stellantchasmus falcatus* Onji et Nishio, 1915)、前腸異型吸虫 (*Pygidiopsis summus* Onji et Nishio, 1916) 等数多くの種類が発見され報告されてき

属虫体計測一覧 (μ)

頭 幅 径	腹吸盤	辜 丸		貯 精 の う		卵 巢		食道長	
		右	左	長 径	幅 径	長 径	幅 径		
32.7—42.0 (37.8)	37.3—53.7 (42.0) × 35.0—58.3 (42.9)	56.0—140.1 (90.2) × 56.0—81.7 (65.3)	63.0—109.7 (88.7) × 58.3—81.7 (73.9)	93.3—116.7 (99.2)		(46.7)	(65.3)	(70.0)	46.7—107.3 (74.7)
(25)	(37)	96 × 78	88 × 75	(120)	(30)	(50)	—	70—105	
15—24 (19)	24—39 (31)	51—93 (71) × 38—84 (54)	60—108 (74) × 45—75 (51)	69—105 (90)	18—48 (30)	27—48 (36)	30—54 (38)	39—123 (58)	
30—45 (36)	39—45 (42)	72×120 (104) × 60—99 (72)	69—135 (72) × 51—81 (65)	45—75 (58)	39—51 (46)	30—45 (41)	30—51 (38)	75—150 (115)	

(Hematoxylin-eosin あるいは Alum carmin 染色)

たが、他の重要な寄生蠕虫類の研究に急がしくそれ等の研究の影に姿をひそめ、その研究はやゝおくれ、又予防医学的にも一般民衆の関心もうすい様である。

しかしながら、我々日本人の食生活の面から考えても又実際に著者ら(1964)の調査においても、地域によってはその殆んど全員に横川吸虫の寄生が認められる地方もかなりある事実は文明人として由々しき問題と考えられるのである。

著者らはこれ等の観点に立つて、ここ数年来横川吸虫を始めとする Heterophyidae に関する各種の仕事に手を染めてきたが、近年、横川吸虫と異なる微小吸虫が高知県出身者より発見される事実を認め、同虫が明らかに *Stellantchasmus* 属の吸虫であることがわかったが、その虫卵がかなり横川吸虫卵あるいは肝吸虫卵等に酷似している事より、これから後のこれら吸虫類の研究にはかなりの注意力を要するものと考えられるので、その注意を喚起すると共に高知県がその流行地であることを報告する。

著者らの2症例よりとり出せる吸虫は Yamaguchi (1958)による分類からしても、最も小型の吸虫であること、貯精のうは強じんな筋肉性のものからなること (Seminal vesicle forming strongly muscular expulsor) より明らかに *Stellantchasmus* 属と同定した。

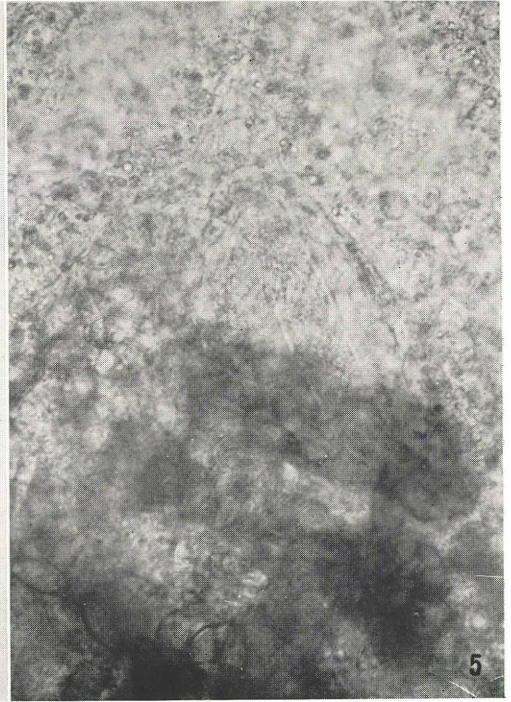
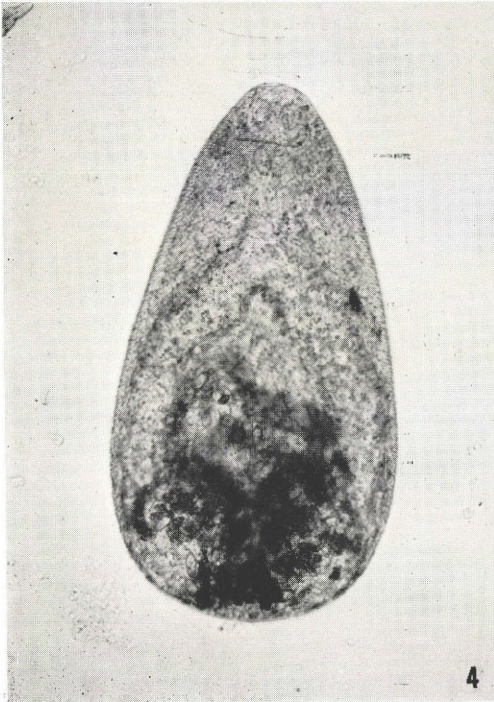
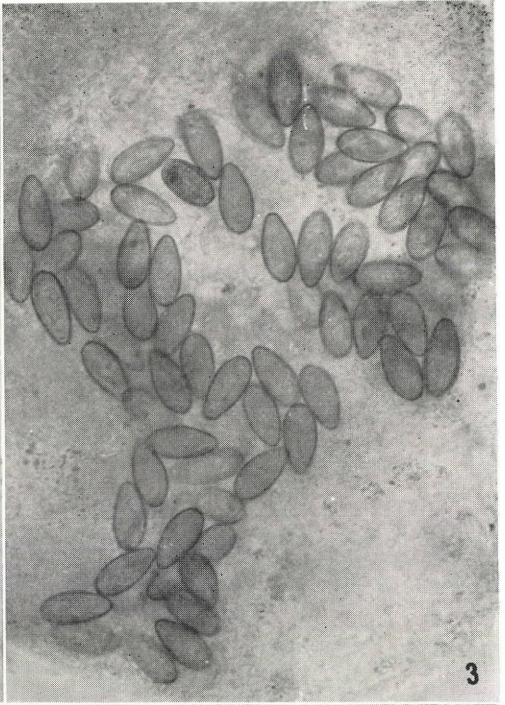
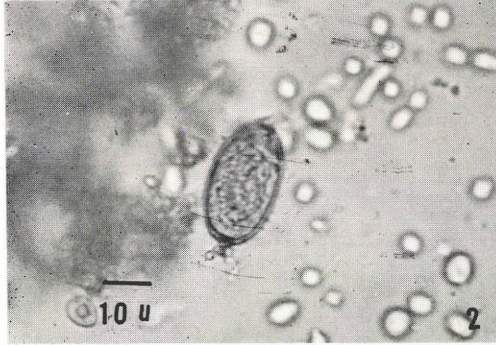
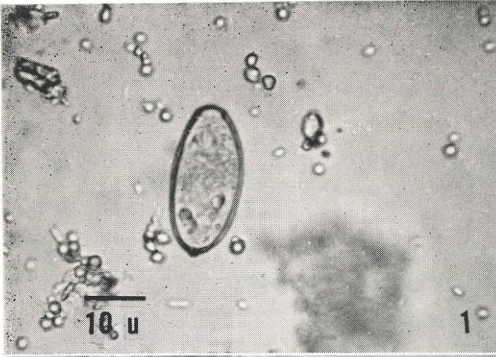
Stellantchasmus 属の吸虫は現在、三種類報告されている。即ち、恩知・西尾(1915)による *Stellantchasmus*

falcatus Onji et Nishio, 1915, 勝田 (1931, '32) による *Stellantchasmus formosanus* Katsuta, 1931, および *Stellantchasmus pseudocirrata* (Witenberg, 1929) (*Syn. S. amplicaealis* Katsuta, 1932) の三種であるが、現在吾国における人体寄生例としては前 *S. falcatus* のみが広島県 (赤木ら, 1953), 岡山県 (高橋, 1929; 富永ら 1946) から報告され、他の地域からはその分布が考えられながらも見出されていない。

これらの種は勝田 (1931, '32)によると *S. formosanus* は *S. falcatus* に比べて、

- 1) 体は極めて微小。
- 2) 前咽頭及び食道は短小。
- 3) 辜丸は左右略同大、同位置。
- 4) 卵黄巢は左右各8個の腺葉より成る。
- 5) 陰茎並に陰のうを欠き、且つ生殖盤を所有せず。
- 6) 卵子は形微小にして正卵円形を呈し、中央部幅広く小蓋との移行部は緩漫にして著しき隆起を示さず、卵殻稍厚くして *Clonorchis sinensis* 卵との鑑別も明らかに区別し得る。

と記されており、本種が恩知・西尾(1915)による *S. falcatus* についての計測値よりも全ての部位についてかなり大きい、それは圧平標本による為と考えられる。又 *S. formosanus* と本種を比較する時、勝田(1931)の報告によるものよりはるかに大きく、卵黄巢が小塊状であり、辜丸が左右異なり位置がずれていることにより



S. falcatus により近いと考えられた。

又、*S. pseudocirrata* と *S. falcatus* と比べると、前者は後者に比して

- 1) 体が大きく
- 2) 口吸盤は頗る大
- 3) 咽頭の横径著しく大
- 4) 食道著しく長し
- 5) 腸管著しく膨大幅径広し
- 6) 貯精のうは短大茄子状を呈す
- 7) 睾丸は右側殊に大、腹面に近く存在す。
- 8) 卵黄巢は5個乃至6個の腺葉よりなる。
- 9) 卵子は形小、卵殻薄く、一般に細長

とある。本種はやや腸管が膨大し幅径広く *S. pseudocirrata* に近い様であるが体の小さいこと、食道がさして長くなく、貯精のうが茄子状でなく紡錘形をし、卵黄巢が腺葉でないこと等から *S. pseudocirrata* とは異なると考えられた。

なお、我国で現在まで報告された種類は殆んど *Stellantchasmus falcatus* であり、わずかに宮崎 (1946) が鹿児島県の鼠から *Stellantchasmus formosanus* を記録しているのみである。

以上のことから、本種は *Stellantchasmus falcatus* Onji & Nishio, 1915 と同定さるべきものと考えられた。

尤も、同地方においてはすでに三島・山中 (1959) が魚類からその被のう幼虫を発見し人体感染も考えられることを報告しているが実際にはその報告はなく、今回の報告が始めてであり、今後この地方の調査には横川吸虫卵や肝吸虫卵との異同に注意せねばならないと考えられる。

要 約

1963年及び1964年の両年、国立公衆衛生院において各保健所あるいは衛生研究所からの細菌検査学科受講生の糞便検査と虫体の検索から、高知県出身者に *Stellantchasmus falcatus* Onji & Nishio, 1915 の寄生するこ

とを認め、同地方が同吸虫の高浸淫地と考えられたので報告する。

参 考 文 献

- 1) Africa, C. M., W. De Leon & E. Y. Garcia (1940): Visceral complications in intestinal heterophyidiasis of man. Acta Medica Philippina, Monographic Series, No. 1.
- 2) 青景金吾 (1956): 瀬戸内海中国地方海域の半鹹水産魚類に於ける吸虫類の研究。東京医事新誌, 73(4), 217-224; 寄生虫学雑誌, 5(2), 254.
- 3) 赤木孝・戸川智・正岡千秋 (1953): 有害異形吸虫の人体感染に於ける駆虫所見, 寄生虫学雑誌, 2(1), 29.
- 4) 赤木孝 (1954): 岡山地方の半鹹水産魚類に於ける吸虫類被囊幼虫の種類について, 寄生虫学雑誌, 3(1), 45.
- 5) 浅田順一 (1928): 我国人体に蔓延せるヘテロフキエス属吸虫の研究, *Heterophyes heterophyes* の第1中間宿主の決定並に其發育史に関する実験的研究。東京医事新誌, (2564), 6-12.
- 6) 浅田順一・梶房子・越智籌枝 (1952): 異形吸虫類の人体寄生における一新駆虫法について。日本寄生虫学会記事, 21, 67-68.
- 7) 浅田順一・梶房子・越智籌枝 (1954): 異形吸虫の人体感染におけるカマラ駆虫法の応用価値に就て。寄生虫誌, 3(1), 117.
- 8) 浅田順一・岡橋清・草浦勉・谷本普子・千住清一・土肥素子・土肥俊之 (1964): 主要なる人体異形吸虫類の展望。日本医事新報, (2084).
- 9) 桂田富士郎 (1912): 一新吸虫, メタゴニムスに就て。東京医事新誌, (1796). 3483-3489.
- 10) 勝田功 (1931): 台湾における半鹹水産魚類を中間宿主とする吸虫類の研究 (第1報) 鰻を中間宿主とする新吸虫 *Stellantchasmus formosanus* に就て。台湾医学会雑誌, 30(12), 1404-1417.
- 11) 勝田功 (1932a): 台湾における半鹹水産魚類を中間宿主とする吸虫類の研究 (第5報) 鰻を中間宿主とする新吸虫 *Stellantchasmus amplicaealis* に就て。台湾医学会誌, 31(4), 457-471.
- 12) 勝田功 (1932b): *Stellantchasmus* 属吸虫の特徴とする腹吸盤装置並に其附属器の構造に就て。台湾医学会誌, 31(11), 1283-1288.

写 真 説 明

1. 糞便中の *Stellantchasmus falcatus* の虫卵 (10% formalin 固定)。
2. 同時寄生の横川吸虫の糞便内卵子 (生鮮標本)。
3. *Stellantchasmus falcatus* 子宮内卵子 (生鮮)。
4. *Stellantchasmus falcatus* 母虫の全体生鮮標本。
5. 同母虫の貯精のうを示す。

- 13) 金光虎雄 (1953) : 福山地方に於ける半鹹水産魚類を中間宿主とする吸虫類の研究, 特にヘテロフィエス属吸虫. 広島医学, 6 (4-5), 270-283, 日本寄生虫学会記事, 21, 66-67.
- 14) 三島輝章・山中浪速 (1959) : 四国地方における半鹹水産魚類を中間宿主とする吸虫類の研究. 寄生虫学雑誌, 8(3), 369-370.
- 15) 宮崎一郎 (1946) : 鹿児島地方の鼠に関する研究 (III), 鹿児島市内の住家性鼠について寄生蠕虫の調査. 鹿児島医専報告, 2, 27-30, 医学と生物学, 9(4), 219-220.
- 16) 恩知与策・西尾恒敬 (1915) : 鰯科を中間宿主とする吸虫類について (第2報). 東京医事新誌, (1946), 2390-2395; (1948), 2499-2505; (1950), 2600-2603.
- 17) 恩知与策・西尾恒敬 (1916a) : 腸寄生新吸虫に就て. 医事新聞, (949), 589-593.
- 18) 恩知与策・西尾恒敬 (1916b) : 半鹹水魚類を中間宿主とする吸虫に就て. 千葉医学専門学雑誌, (80, 81), 229-249.
- 19) 恩知与策・西尾恒敬 (1924) : 腸ヂストマ類に就て. 千葉医学会雑誌, 2(3), 551-399.
- 20) 越智シゲル (1931) : 半鹹水産魚類を中間宿主とする吸虫類の研究—*Pygidiopsis summus* の發育史に就て. 東京医事新誌, (2712), 346-353.
- 21) 太田垣博雅 (1952) : 尾道地方市販の半鹹水産類に於ける被囊幼虫の分布状態について. 日本寄生虫学会記事, 21, 67.
- 22) 太田垣博雅・金光虎雄 (1953) : 広島県備南地方市販の半鹹水産魚類における吸虫類被囊幼虫に関する研究. 東京医事新誌, 70(10), 575-578.
- 23) 高橋昌造 (1929) : 肝臓ヂストマ卵子に類似する諸種の腸寄生吸虫卵子, 特に吾人の糞便内に見られたる *Stellantchasmus falcatus* 及び *Pygidiopsis summus* のそれに就て. 福岡山県下の犬及び猫に於ける寄生虫調査. 岡山医誌, 41(7), 1502-1513.
- 24) 富永覚仁 (1942) : 岡山県下における寄生虫調査, 特に肝臓ヂストマ *Clonorchis sinensis* の蔓延状況に就て. 大阪高等医専雑誌, 9(4), 463-476.
- 25) 高林良光 (1953) : 魚類を中間宿主とする吸虫類の研究 (特に山口県下に於ける検査). 岐阜医科大学紀要, 1(3), 219-226.
- 26) 横川定 (1913) : 鮎を中間宿主とする新寄生虫並に同虫に対する一属の新設. 岡山医誌, (279), 255-266; (280), 337-358.
- 27) 山中浪速 (1959) : 四国地方における半鹹水産魚類を中間宿主とする吸虫類の研究. 東京医事新誌, 76(6), 377-381.
- 28) Yamaguchi, S. (1958) : Systema Helminthum. Volume I. The digenetic trematodes of vertebrates. Part. 1. New York.
- 29) 影井昇・大島智夫・木畑美智江・美濃地襄二・和崎斎 (1964) : 横川吸虫症の濃厚浸淫地における疫学的研究. 第24回日本寄生虫学会東日本大会

TWO CASES OF HUMAN INFECTION WITH *STELLANTCHASMUS FALCATUS* ONJI ET NISHIO, 1915 (HETEROPHYIDAE) IN KOCHI PREFECTURE

NOBORU KAGEI, TOMOO OSHIMA, KAZUO ISHIKAWA

&

MICHIE KIHATA

(Division of Parasitology, The Institute of Public Health, Tokyo)

The prevalence of intestinal parasites has been investigated in the student of the Institute of Public Health in 1963 and 1964, and human *Stellantchasmus falcatus* infection was found at two cases. Both two patients have been living in Kochi Prefecture. Case I was 45 years old female harboring 1,089 adults, and Case II was 35 years old male only 6 adults. These were the first report of human cases with in Shikoku Island, and it seems that *Stellantchasmus falcatus* would be common in the inhabitants of Kochi Prefecture who have habitually eaten *Mugil cephalus* Linnaeus. and *Liza haematocheila* (Temminck & Schlegel).